

令和 2 年 6 月 3 日現在

機関番号：43607

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05642・19K20847

研究課題名（和文）保育の質という社会的枠組みの生成過程 - 農村保育所における標準化と異質化に着目して

研究課題名（英文）Process of Framing the Quality of Early Childhood Care and Education:  
Standardization and Heterogeneity in a Rural Preschool

研究代表者

茶谷 智之（Chaya, Tomoyuki）

松本短期大学・その他部局等・助教

研究者番号：20824808

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：研究代表者による2年間のフィールドワークによって、北海道A町の農村保育所改革における「保育の質という社会的枠組み」の生成過程の様相が明らかになった。農村保育所統廃合のプロセスには、町長、子育て支援課職員、保育士、畑作農家、酪農家、保護者など複数の関係者が参与し、異なる立場からの多様な意見が出されていた。そこにおいて保育の質に対する多様な意味づけが肯定された背景には、おもに意思決定において住民投票という多数決の仕組みが導入されなかったこと、保育の現場に関わる関係者のあいだで非指示的な言葉が用いられていたことがあると指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで保育の質をめぐる先行研究では、標準的な質を求める動きと、子どもや地域の多様性を重視した質のあり方を求める動きが対抗的に捉えられてきた。それに対し本研究は、保育の質という社会的枠組みが生成される過程と、そこに参与する多様な関係者の利害や思惑に着目し、保育の質の標準化と異質化を対抗的ではなく相互補完的に捉えた。その視座は、世界各地の就学前教育・保育の現場において求められている、全国レベルの標準化と地域社会のニーズとの調整においても活かすことができる可能性があるため、今後も本研究成果を広く公表していきたいと考えている。

研究成果の概要（英文）：Through two years of fieldwork, the researcher has discovered the process of framing the quality of early childhood care and education (ECCE) in the reformation of rural preschool in Hokkaido, Japan. I have found that various actors such as Mayor, staff of the child care support section, child care workers, farmers, dairy farmers, and parents participated in this process and raised their voices. I have indicated that they could create various meanings to the quality of ECCE because a local referendum system as majority decision did not install in this decision-making process, and non-indicative wards have been used in interaction in the preschool.

研究分野：文化人類学

キーワード：保育の質 農村保育所 社会関係

## 1. 研究開始当初の背景

これまで保育の質をめぐる研究は、幼児教育プログラムの効果から質を分析するトップダウン型研究と、保育現場の観察を通してその地域における質の内実を分析するボトムアップ型研究に分類できる。前者には、幼児教育を通じた認知発達がその後の読解や算数の技能発達に影響を与えることを示した研究があり (Campbell et al. 2001)、保育の質の標準化を進める論拠となる。一方、後者には、市場化による施設の選択制が恵まれない子どもにさらなる不利益をもたらすことを示す研究 (Fuller 2007) があり、標準化した構造やカリキュラムに対抗する子どもや地域の多様性を重視した保育のあり方を見出す。同様に、標準化された保育とは異なる保育実践や保育者の専門性を追究する国内の研究 (根ヶ山ほか 2005) は、標準化した保育の質に対する異質化の動きを捉える実践研究として位置づけられる。

このように先行研究は標準化と異質化の動きを対抗的に捉える傾向にあった。しかし、いま問われているのは、全国レベルの標準化と地域社会のニーズとの調整の質である (OECD 2006)。本研究は、保育の質の多様性を重視する点では後者の研究潮流を引き継ぐものの、保育の質の標準化と異質化を対抗的ではなく相互補完的に捉える点で異なる。本研究は、保育実践や保育者の専門性を何らかの基準に基づき評価する従来の保育の質研究に対し、子どもの生活を左右する保育の質が生成されるプロセスの改善策を提示することをめざすものである。

## 2. 研究の目的

近年日本では、保育施設の定員超過や不適切な給食提供などの問題が明るみとなり、国家の統制のみで保育の質を確保することが難しくなりつつある。そこで重要となるのが、企業や NPO、保育者や保護者、政治家や地域住民らが、異なる立場から保育の質を考え向上させようとする動きである。本研究はこうした新たな動きがみられる北海道 A 町の農村保育所改革を題材として、多様な関係者のあいだで保育の質が具体化されるプロセスを描写・分析する。

保育の質の具体化が、特定の立場の利害や思惑、期待によるものか否か。それは、民主的な制度を通じて要望を反映することが困難な子どもにとって重要な問いである。他者によって意味づけられ、構築された質の高い保育という枠組みのなかで、子どもは生活することを求められるからだ。本研究は、保育の質という社会的枠組みの生成過程において、質に対する意味づけの多様性が肯定される社会関係を明らかにし、一票を持たない子どもの生活を維持・向上させる仕組みを解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

従来の保育研究において、保育の質は保育者の専門性との関連で検討される傾向にあった (秋田ほか 2007)。遊びを継続させる保育者と子どもの関わりや、保育者同士や親との関わり的重要性を指摘する研究である。これらが示すポイントは、保育の質は初めから存在するものではなく生成されるものであり、そこには子どもを取り巻く異なる立場の関係者の存在が重要であるということである。しかし先行研究は、保育の質に対して、複数の関係者がそれぞれ異なる利害や思惑、期待を有していることを看過する傾向にあった。

そこで本研究では、A 町でのフィールドワークを主たる研究の方法として採用した。フィールドワークでは、A 町の民族誌的データの収集、行政資料の収集、関係者へのインタビュー、保育所での参与観察等を行う。それにより、保育の質という社会的枠組みの生成過程において、利害や思惑などの異なる複数の関係者を視野に入れることが可能となる。

こうして収集したデータを分析し、その成果を学会等で発信することによって、国内外の研究者との積極的な意見交換を行う。それを通して、保育の質という社会的枠組みの生成過程とそこに参与する関係者の様相を明確に示すことで、保育の質をめぐる研究の深化に貢献することをめざす。

### 参考文献

- 秋田喜代美・箕輪潤子・高櫻綾子. 2007. 「保育の質研究の展望と課題」『東京大学大学院教育学研究科紀要』47: 289-305.
- Campbell, F. A., Pungello, E.P., Miller-Johnson, S., Burchinal, M. and Ramey, C. 2001. The Development of Cognitive and Academic Abilities: Growth Curves from an Early Childhood Educational Experiment. *Developmental Psychology*, 37: 231-242.
- Fuller, B. 2007. *Standardized Childhood: The Political and Cultural Struggle over Early Education*. Stanford: Stanford University Press.
- 根ヶ山光一・星三和子・土谷みち子・松永静子・汐見稔幸. 2005. 「保育園 0 歳児クラスにおける乳児の泣き-保育士による観察記録を手がかりに」『保育学研究』43(2): 65-72.
- OECD. 2006. *Starting Strong II: Early Childhood Education and Care*. Paris: OECD.

## 4. 研究成果

本研究のフィールドワークを行った北海道 A 町は、小麦・てん菜・豆類などの畑作農業が基幹産業である。加えて酪農も盛んであり、農村保育所がこうした産業に従事する労働者を支える重要な位置づけにあった。全国的にこうした農村保育所は 2000 年代半ばから統廃合が進んでいる。その背景には、少子化に加え、公立保育所運営費の国庫負担金が一般財源化されたことがあった。しかし、A 町の農村保育所はその後 2018 年まで存続し続けた。2013 年から約 5 年間の議論の末、2018 年に統廃合が行われたのである。そのおもな要因にあったのが、少子化に伴う保育所利用者数の減少であった。しかし、利用者数の減少があったとはいえ、基幹産業を支える保育所であったことから統廃合には多くの反対意見があった。それにもかかわらず、統廃合が進んだのは少子化に伴う利用者数の減少という論理のみでは説明することができなかった。

本研究がおもに明らかにしたことのひとつとして、農村地域の少子化に伴う農村保育所の定員割れが統廃合の契機とはなったものの、これまで農村保育所の存立を支えてきた地域住民が一枚岩ではなく、異なる立場からの多様な意見のもと、賛成・反対の議論が重ねられ統廃合が進んだということである。行政が実施した利用者調査結果（2013 年）では、畑作農家のみならず、繁忙期と閑散期の区別がない酪農家世帯や、一般企業で働くサラリーマン世帯など、非畑作農家世帯にも農村保育所が利用されているということが明らかとなった。利用者のうち畑作農家は 3 割にとどまっている農村保育所もあった。また、農村地域全体にも地域差があり、農村保育所の統廃合により生じる登園距離の問題に関して地区ごとで意見の相違が生じた。それは新聞報道を通して、地区間の対立を深めることにもつながった。

さらに、同一地区住民の内部、世帯内でも農村保育所をめぐる考え方や認識が違うことが明らかとなった。先行研究が指摘する通り、A 町農村保育所は地域にひらかれた保育所であった。保育所の運動会はその地区全体の行事であり、保育所運営への保護者の参加度も高かった。そこには出番が多くて楽しいと感じる保護者もいれば、負担を感じる保護者もいた。また、ある男性の妻は市街地の認可保育所に子どもを通わせたいと考えているが、男性の母親は農村地域の子どもはその地域の保育所に通わせるのが当たり前と考えているように、世帯内部での意見の相違もあった。

以上、A 町農村保育所の統廃合のプロセスでは、農村地域住民の同定が困難であり、異なる立場から多様な意見が出されていた。そこでは統廃合が、行政の思惑のみで一方的に進んでいたのではなく、多様な意見や価値観をもつバラバラな「地域住民」との相互作用によって進展していたのである。

こうした統廃合を経て、複数の農村保育所を統合した新たな公立保育所が誕生した。そこでの保育の質に対する所長や保育士等の考えを当初は調査しようと考えていたが、実際に参与観察してみると、保育の現場で「保育の質」という言葉が出てくる場面は極めて稀であることがわかった。むしろ保育所長と保育士、保育士同士、保育士と園児とのあいだで使われていたのは、「いつ」「どうやって」という言葉づかいであり、それこそが保育の内容に対する多様な視点や意見をそれぞれが提示することのできる環境を構築していることが明らかとなった。

以上の農村保育所改革全体を通して、保育の質に対する多様な意味づけが肯定された背景には、異なる立場の人々が参加できる討論の場が多数設けられていたこと、その上での意思決定において住民投票という多数決の仕組みが導入されなかったことがある。とくに多数決を行わずに、行政の責任で統廃合に関する最終決定を行うという方針があったからこそ、保育の質に対する多様な意味づけをそれぞれの立場や属性に応じて行うことが可能になったと考えられる。一方、統廃合後では、保育の現場に関わる関係者のあいだで使われている非指示的な言葉づかいが重要であったと考えられる。

近年、アジアにおける就学前教育・保育改革は右傾化している（Lee 2012）。具体的には、保育所の民営化やトップダウン型の統制が強まり、保育士の自律性が損なわれることなどが指摘されている（Gupta 2018）。こうしたアジアの潮流において、本研究の成果は、多様な関係者との討議を通して、行政が保育に対する責任を持ち、実際の保育の現場においても所長や保育士の裁量権が確保される可能性を示すものである。今後、これらの成果を世界各地の就学前教育・保育改革の議論の遡上にのせて、保育の質をめぐる議論の深化に貢献していきたい。

#### 参考文献

- Gupta, A. 2018. How Neoliberal Globalization is Shaping Early Childhood Education Policies in India, China, Singapore, Sri Lanka and the Maldives. *Policy Futures in Education*, 16(1), 11-28.
- Lee, I. F. 2012. Unpacking Neoliberal Policies: Interrupting the Global and Local Production. *Journal of Pedagogy*, 3(1), 30-42.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

|   |                     |
|---|---------------------|
| 1. 著者名<br>茶谷智之                                    | 4. 巻<br>2-1         |
| 2. 論文標題<br>自然保育における「安全配慮」 - 子どもの即興的な遊びを支える保育者の専門性 | 5. 発行年<br>2019年     |
| 3. 雑誌名<br>自然保育学研究                                 | 6. 最初と最後の頁<br>14-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                     | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難            | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>Chaya Tomoyuki   |
| 2. 発表標題<br>Making a Democratic Space in Preschools: A Case Study of a Government Preschool in a Rural Area in Japan |
| 3. 学会等名<br>The 20th PECERA International Conference (国際学会)  |
| 4. 発表年<br>2019年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>茶谷 智之   |
| 2. 発表標題<br>少子化という論理が見えなくするもの - 農村保育所統廃合プロセスにあらわれる地域住民内部の差異 |
| 3. 学会等名<br>日本社会福祉学会 第67回秋季大会                               |
| 4. 発表年<br>2019年  |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|